

* 登場人物

仁美 (33) 子供服のデザイナー
孝志 (33) 仁美の幼馴染み。農家の跡取。

英之 (55) 仁美の父。

幸子 (52) 仁美の母。

広樹 (36) 仁美の兄。

真弓 (34) 広樹の婚約者。

木村 (59) 仁美の小六の時の担任。

* あらすじ

仁美 (33) は札幌でデザイナーをしている。担当は子供服ばかりで、幼い頃からの夢だった大人の服は、何年経っても担当させてもらえない。仕事の手答えも感じられず、意欲を失いかけていた。

久し振りに帰省する仁美。駅に降り立つと、幼馴染みの孝志が待っていた。

自分の足跡と存在価値を探す仁美。だが、街は大きく変わっていた。最後の抛り所の家族まで、兄に嫁が来ることになり、その形態を変えようとしている。

落ち込む仁美は、散歩をしていて、畑に転がり落ちてしまう。

そこは、来年の収穫に向けて養成中の、アスパラ畑。日の光を集めようと、緑の細かい葉が精一杯伸び、風にそよいでいた。

助けに来た孝志に、自分の存在意義を尋ねる仁美。孝志はこのアスパラのように上に向かって伸び続けることだと諭す。

アスパラのそよぐ街で

成樹
久美子

SE (北見駅のホーム)

アスファルトに響く乗客の靴音。

特急の滑り込む音。

ドアの開く音。

到着アナウンス「北見、北見……」

仁美M「池北線はホームを渡って……あ、今

は『ふるさと銀河線』なんだよねえ」

SE (銀河線の車内)

揺れる列車の音。

老人の談笑の声。

仁美M「高校の時は、確か二両つながってた
ような気がするけど」

SE 車内アナウンス「次は日の出、日

の出です」

駅の引き戸を開ける音。

車のクラクション。

孝志「仁美！」

仁美「あれ？ 孝志？」

SE 車のドアの開閉音。

車内に軽く響くエンジン音。

孝志「すごい荷物だな」

仁美「うん、一週間以上の休みだからね。も

う家に帰っても私の物、何もないから……」

お客さんだよね」

孝志「高校卒業して、年に一回か二回しか帰

ってこないんじゃないよな」

仁美「だって仕事が忙しいんだもん」

孝志「デザイナーか、かつこいいいな」

仁美「でしょ？」

孝志「昨日見たよ、広ちゃんの婚約者。仁美、

負けてるわ」

仁美「別にお兄ちゃんの婚約者の顔だけ見

帰ってきたわけじゃないよ」

孝志「わかっているって。ばあちゃんに線香あ

げに来たんذار？」

仁美「孝志のばあちゃんにもお線香あげなき

やね」

孝志「いつもありがとな」

仁美「……って、お盆には来ようと思つてた

んだけどね」

孝志「不規則な仕事なんذار？」

仁美「まあね、締め切りの前とか大変なの。

あ！ 止めて！ お母さん！ もう畑から

上げれそう？ 先に帰ってるよ！」

SE 車の走り去る音。

(間)

英之「あーいい湯だった。お、今日は炊き込

みご飯か」

幸子「仁美が作ったのよ」

英之「札幌でちゃんとやってたんだ」

幸子「お父さん、仁美だって三十三ですよ」

英之「どうだ、孝志君なんか」

仁美「やだ、私、保育所の頃、孝志の鼻水、

拭いてやってたのよ。結婚したら今度は

孝志のパンツ洗うの？ 冗談でしょ？」

幸子「会社でもそんな風に話してるの？ それ

じゃ嫁さんにもらおうなんて誰も思つてく

れないね」

仁美「いいの、結婚なんてしないから」

英之「おーい、広樹、御飯だぞ！」

(間)

真弓「はじめまして、佐藤真弓です。どうぞ

よろしく願います」

幸子「早速、結納の日になち、決めなくちゃ」

広樹「母さん、舞い上がんないですよ」

英之「だってお前」

幸子「そうだよ、三十六まで待った甲斐があ

るよ」

英之「ばあちゃんにも線香あげてつてや」

仁美「お茶、どうぞ」

広樹「妹の仁美。札幌で服のデザインやつて

るんだ」

真弓「デザイナーなの？ カッコイイ」

仁美「たいしたことないんです」

真弓「何かを作り出すって、ステキね！」

仁美「ありがとうございます」

広樹「それでさ、父さん、母さん、この間の

話、考えといてよ」

英之「……うん、考えてるよ。な、母さん」
幸子「そう……そうね」

(間)

SE 夕食支度中の台所。

仁美「ねえお母さん、昨日お兄ちゃんが言っ
てた『話』ってなあに？」

幸子「ん？ 真由美さんがね、家で音楽教室
をやりたいんだって」

仁美「教室って、場所がないじゃない」

幸子「ばあちゃんの部屋が空いてるからそこ
にピアノを入れてやりたいんだって」

仁美「畑はどうするの？」

幸子「お父さんと、広樹と三人でやるよ」

SE ドアの開閉音。

英之「おう、仁美、一杯付き合えや」

SE ビールの栓を抜く音。

英之「ああっ、旨いな、うん」

仁美「お父さん、今聞いた。真弓さん、畑や
らないの？」

英之「広樹はそう言ってたな。でも、こんな
田舎で、ピアノを習う子供が何十人もいる
わけじゃない。ヒマな時は手伝ってもらえ
ば畑はなんとかなるさ」

仁美「そんな大事なこと、なんで私に教えて
くれないの？」

英之「いつ電話してもいないだろ」

仁美「る・す・で・ん」

英之「どうも機械は苦手だ」

仁美「ファックスだって機械でしょ？」

英之「仕事で使うの」

仁美「もう。とにかく、畑は家の大事なこと
でしょ？」

英之「じゃあ、仁美が手伝うか？」

仁美「そんなのできるわけじゃないじゃない！私
は札幌で働いてるのよ」

英之「ずっとやっていける仕事なのか？」

仁美「あたり前でしょ」

英之「……帰ってこんか」

仁美「お父さん」

英之「今の農業は仁美の知ってる昔と違うぞ。
品種改良も進んで、機械もたくさん入って、
力仕事ばかりじゃないしな」

仁美「やあよ。旅行にも行けないし」

英之「あれは牛がいた時の話だ。旅行は畑が
休みになった時いくらでも行ける」

仁美「お兄ちゃんが継ぐって決めたんだって
ら、私が帰ってきたって邪魔なだけ」

幸子「(静止するように) いいのよ、そんな
大事なこと、今すぐ決めなくたって」

仁美「もう寝る。おやすみなさい」

SE ドアの開閉音。

階段を上がる音。

幸子「仁美に戻ってこいだなんて……」

英之「いいだろう、自分の家なんだから」

幸子「いざれ出てっちゃうんですよ」

英之「何で」

幸子「泣いたって止めたってお嫁に行っちゃ
うんですから」

英之「いい奴がいるのか？」

幸子「いてくれなきゃ困りますよ」

英之「仁美から何か聞いているのか？」

幸子「何にも。だから心配してるんです」

英之「一人寂しく年を取っていくのかな」

幸子「だからって小姑は可哀相ですよ」

英之「兄弟が多かった俺達の時代には何にも
心配いらなかったのにな」

幸子「みんな農家になったもの」

英之「もつと子供作るときや良かったな」

幸子「お父さんが産んでくれるならね」

SE (仁美の部屋) BGM。

仁美M「ばあちゃんの部屋、なくなっちゃう
のか……。でも、広にいのあんな嬉しそう
な顔、初めて見た。何か、私の帰るところ、
なくなっちゃうのかな……」

(間)

SE (畑) 車が走ってきて止まる音。

孝志「おぼさーん、仁美は？」

幸子「ああ、孝志君。仁美、なんだか朝早く出かけたよ」

孝志「どこに？」

幸子「休みは有効に使うんだとか言って」

孝志「ありがとう」

SE (小学校の校庭)

子供が鬼ごっこをしている声。

仁美「ブランコも鉄棒も、こんなにちっちゃかったんだ。……六年生はあの端の窓の教室だったんだよね。あれって、木村先生？(叫ぶ) 木村せんせい！」

SE 走って、上がる、仁美の息。

木村「えっと、誰のお母さんでしたっけ」

仁美「違います。仁美！ 仁美です！」

木村「仁美？ おお、覚えてる、覚えてる。久しぶりだなあ」

仁美「お久しぶりです」

木村「いやあ、綺麗になったなあ」

SE (職員室) 渋く開閉する引き戸の音。

柱時計の振り子の音。

木村「そうか、先生も年を取る筈だなあ、仁美も三十三か」

仁美「あ！ 先生の誕生日、あさって！」

木村「よく覚えてるな。来年で定年退職だ」

仁美「ずっとこの小学校に？」

木村「いやいや。三年ぐらいずつ転勤して、今年からまたここで六年生の担任だ」

仁美「それで……」

木村「てっきり。クラスの子のお母さんだと思っただよ」

仁美「参ったな。結婚もまだなのに」

木村「結婚しないのか？」

仁美「そのうちします。今ね、先生に褒めて貰ったデザインの仕事してるんです」

木村「卒業文集に書いてあった夢か？」

仁美「そうです」

木村「頑張ってるんだな」

仁美「頑張ってます……。あの時計、まだ動いてるんですね」

木村「えん、頑張ってる」

仁美「先生……」

木村「ん？」

仁美「また来る」

木村「うん……また来い」

SE (車内) 車の走る音。

孝志「まったく、仁美の奴、どこ行っちゃったんだよ」

SE (中学校の校庭)

遠くで音楽の授業風景や、体育のランニングの掛け声。

仁美「あー、建て直したんだ。立派な中学校になっちゃって。あの曲、題名何だったっけ……。みんな、どうしてるかな？ クラス会の幹事って誰に決めたんだっけ」

孝志「(遠くから) 仁美い！」

仁美「何で他人のノスタルジーを壊すの」

SE 車内に軽く響くエンジン音。

軽快なBGMをかけている。

孝志「広ちやんの結婚がショックで、もう札幌に帰ったのかと思ったよ」

仁美「んなわけないでしょ。せつかく帰ってきたから、散歩でもって思ったの」

孝志「仁美の散歩って、こんな遠くまで来ちゃうんだ」

仁美「三年間通った道だもの……ってやっぱ四キロはつらかった」

孝志「あーあ、年は取りたくないねえ」

仁美「あんた。言っついでいいことと悪いことがあるでしょ」

孝志「俺って正直だからさ」

仁美「正直なら、ついでに親切になりなさいよ、北見まで連れてって」

孝志「買物？」

仁美「久しぶりにいろいろなどこ見たいの。高校とか、よく行った喫茶店とか」

孝志「了解！」

SE BGMの曲が変わる。

仁美「ねえ、こんな大きなお店あった？」

孝志「去年出来たんだよ、家電量販店」

仁美「へえー。あ、あつちは？」

孝志「食料品と、衣料品の激安店」

仁美「すごく街が広くなったって感じね」

孝志「うん。あ、ドルフィンに行こうよ」

仁美「え？ あの喫茶店、まだあるの？」

孝志「ああ、変わってないよ」

仁美「つれてって！」

SE ドアの開閉音。カウベルも鳴る。

(店内) セミクラシックが流れる。

仁美「ホント、変わってないね」

孝志「だろ？ あ、パフェ二つ」

仁美「ねえ、新しい高校で出来たの？ あの制服、どこ？」

孝志「俺達の学校だよ」

仁美「うちの学校？」

孝志「最近ブランド志向だからね」

仁美「変わったんだあ。何だか寂しいね」

孝志「そう、俺達は昔の人になったんだ」

仁美「いいね高校生って。キラキラしてて」

孝志「俺達だってキラキラしてただろう」

仁美「そうだったっけ……」

孝志「何になりたいとか、出来もしない夢、見たよな」

仁美「私、パリコレに出せるくらい有名なな

りたかったな」

孝志「……パリコレ……って何？」

仁美「世界のファッションショーの頂点みたいなもの。そこに出来るような、超一流デザイナーになれると思ってた」

孝志「なれないわけ？」

仁美「現実とは意外と早く見えるものだった、なんで学校で教えてくれないんだろう」

孝志「夢のないやつ。仕事の他に夢はないの？結婚とかさ……」

仁美「孝志は結婚に夢を抱いてるわけ？」

孝志「ないとは言わないよ。仁美だってそう

だろ？」

仁美「うん。でも、自分が働き出したら結婚

って大変なことだなーって思った」

孝志「どうして？」

仁美「自分が毎日食べて眠るだけで精一杯。ダンナの面倒なんて、見てられない」

孝志「札幌でバリバリやってるんだ」

仁美「バリバリねえ……。デザイン室長なんて役職もついて二年目だしね」

孝志「会社のシステムってよくわかんないけど、長が付くんだから偉いんだろうな」

仁美「ちよっとだけね。孝志もバリバリ？」

孝志「ああ、今、四角いスイカを開発中」

仁美「四角いスイカって……」

孝志「運びやすそうだから？」

仁美「(笑う) 孝志らしいね」

SE (居間)

TVから小さく聞こえる天気予報。

幸子が台所から叫んでいる。

幸子「仁美、お風呂入っちゃいなさい」

仁美「はあーい」

SE (浴室) 仁美、入浴中。

仁美「ふー。室長って言ったって、年下の娘と二人きりのデザイン室だもんねえ」

SE (間) 雀の鳴き声。

目覚ましの音。

仁美「あーあ、良く寝た。さあて、今日は何しようかなー」

SE 階段を降りる音。

ドアの開閉音。

仁美「おはよう……って、誰もいないや、そ

うだよ、畑に行っちゃったか……。よし、今日は手伝ってみるか。今日だけ」

SE アスファルトを歩くヒールの音。

仁美「みんななどの畑にいるんだろう。訊い

ときゃよかった……」

SE アスファルトを歩き続ける音。
仁美「そうだ！ 孝志に電話しよう！」

SE 携帯電話で発信する音。

呼び出し音。

孝志、以下、電話を通じた声で。

孝志の声「もしもし」

仁美「良かった。番号訊いて」

孝志の声「どうした？」

仁美「うちの家族知らない？」

孝志の声「ジャガイモやってんじゃないの？

今どこ？」

仁美「佐々木さんの角曲ったところ」

孝志の声「正しいケータイの使い方だな。畑

に公衆電話なんかないもんな」

仁美「GPSも付いてるけど」

孝志の声「（笑う）じゃあそのまま俺んところ

来いよ。ジャガイモやるから真っ直ぐ上

がって来いよ」

仁美「ええっ、迎えに来て」

孝志の声「自分で来いよ。待ってるから、じ

やあな」

SE 電話切れる。

仁美「ちよっとお……。いいわよ行くわよ」

SE 仁美も電話を切る。

仁美「あーあ、冷蔵庫にあったジュース持つ

て来れば良かったな。戸棚の下にあったお
やつも持ってくれば良かったな」

SE アスファルトを歩き続ける音。

仁美「やっぱり迎えに来てもらおうと」

SE 携帯電話をかける音。

仁美「あ、孝志？ お願い、迎えに来て」

孝志の声「今どこ？」

仁美「清水さんの角を曲ったところ」

孝志の声「全然進んでないじゃん」

仁美「だから迎えに来て」

孝志の声「早く来ないと日が暮れるぞ」

仁美「だから……」

孝志の声「日が暮れたら仕事にならないんだ

から早く来い！」

SE 携帯電話の切れる音。

仁美「もうっ！ 孝志のばか！ 薄情者！

あーあねみんな私を置いてっちゃう……。

私のこと、大事じゃないのかな……」

SE 靴音、響く。

仁美「だいたいさ、結婚だって、家のことだ
って、私に一言も相談しないで決めちゃっ
て、いつも除け者じゃない。だいたい……

あっ！」

SE 転ぶ仁美。アスファルトに倒れる。

仁美「痛い！ もうっ！ どうせ私の人生、
つまずいたり、転んだり、そんなのばっか
りですよ！ よっこらしょ……っ。あっ！
やだ！ 畑に落っこちちゃう！ あっ！」

SE 草むらに落ちる音。

SE 意識の彼方から聞こえてくる孝
志の声。

孝志「仁美！ 仁美！」

仁美「うん……」

孝志「大丈夫か！ 仁美！」

仁美「孝志……」

孝志「ケガしてないか？ 上がれるか？」

SE 服の泥を払う音。

孝志「あんまり遅いから来てみたら……」

仁美「転んだ拍子に落ちちゃったのよ」

孝志「ケガがなくて良かったよ」

仁美「大丈夫、大丈夫……痛っ」

孝志「お前、何だよ、畑に来るのにそんなチ

ャラチャラしたカカトの高い靴」

仁美「流行ってるんだもん」

孝志「玄関に長靴あっただろうが」

仁美「でも良かった。柔らかい葉っぱの畑

に落ちたからあんまり痛くなかった。あれ？
こんなふさふさの綺麗な緑。……ってアスパラ畑！」

孝志「そう、今年二年目の畑だ。今はこんな頼りない、ふさふさの葉っぱだけど、来年の夏前には立派なアスパラになる」

仁美「久しぶりに見たな、風にそよぐアスパラの葉っぱ」

孝志「こいつら元気だぞ。太陽の光をいっぱい吸収しようとして……。だからこんなに葉っぱを広げて頑張ってる」

仁美「いいなこのアスパラは努力を認めてもらえて」

孝志「仁美？」

仁美「私なんか、会社に行って一日中デザイン画を描いて、何枚描いてもボツにされて……。毎日毎日、同じことの繰り返し」

孝志「でも絵を描きたかったんだろ？」

仁美「え？」

ME (優しい、諭すような曲) BGで。

孝志「小学校の時、デザイン画のコンクールで大賞取って、仁美と木村先生が飛び上がって喜んだの、俺、今でも覚えてるよ」

仁美「そうだったね」

孝志「高校の時も毎日、美術室にいたよな」

仁美「私より、孝志のほうが私の夢を覚えているなんて、なんか、不思議だね」

孝志「あたりまえじゃん。何年付き合ってると思ってるだよ」

仁美「ゴメン……ホントはさ、デザイナーって言ったって、子供服ばかりなんだ。毎日毎日、くまさんの、ぞうさんの。私じやなくても、誰でもいい仕事」

孝志「でも、仁美が描いたデザインで子供が本当に嬉しそうにその服を着てくれる……それが仁美の仕事への評価じゃないの？」

仁美「大人の服のデザインをさせてもらえないなら辞めちやいたい。帰ってくる場所だつてあるし。でも真弓さんがお嫁に来たら、私の居場所なんかなくなっちゃうんだよね、きつと」

孝志「仁美の居場所はここじゃないよ」

仁美「え？」

孝志「ホントにやりたいこと、目一杯やらないうで、ダメっぽいから実家の畑を手伝ってますなんて、畑に失礼だろうが」

仁美「私にはもう帰る場所はないってこと？」

孝志「いや、心の拠り所が居場所ってことだつたら、仁美の居場所はここだよ」

仁美「心の居場所はここ……」

孝志「どんなことがあったって、この街は変わらないで仁美を待ってるよ」

仁美「全然成長しなくても？」

孝志「こいつら二年生のアスパラ。仁美もデザイン室々長二年生。来年、どんなイイものになるか楽しみだよな」

仁美「孝志……」

(間)

SE (畑) 車、走ってきて止まる。

孝志「おばさん！ 仁美は？」

幸子「あら？ 孝志君とここに寄っていかなかったの？ 会社から急な仕事だつて呼ばれたらしいのよ」

孝志「十時の特急？」

幸子「だと思っよ」

孝志「ありがと！」

SE 車、走り去る。

(間)

SE 車、走ってきて止まる。

駅の引き戸を開ける音。

仁美「孝志……」

孝志「北見まで行くんだろ？ 送るよ」

仁美「いい。汽車で行く」

孝志「じゃあ俺も行く」

SE 列車の警笛。

(間)

SE (列車の中)

車内に響く列車の走行音。
数人の談笑。

仁美「何でついてくるのよ」

孝志「そばにいたいから」

仁美「ヘンなもの食べたんじゃないの？」

孝志「アスパラも迷惑だよな。こんなかわい
くねーやつにつぶされて」

仁美「みんな踏まれて強くなるのよ」

孝志「あれ？ 俺、仁美のこと踏んだ？」

仁美「何で？」

孝志「ちよつと強くなったかなーと思って」

仁美「いつか踏み返してやる」

孝志「おお、望むところだ」

仁美「(笑う)」

孝志「ところでさ、何で汽車なんだよ」

仁美「もう一度キラキラしたかった」

孝志「キラキラ？」

仁美「高校の頃……この汽車で通ってた頃、
たぶん一番キラキラしてた。この汽車、き
つとキラキラ行きの汽車なんだよ」

SE (北見駅)

札幌行き特急の改札アナウンス。

仁美「ねえ孝志、何であの日駅にいたの？」

孝志「さあね。あ、広ちゃんの婚約者と仁美

とどっちが綺麗か確認しようと思ってさ」

仁美「わざわざ見なきゃならないほど、私の
顔、忘れたってこと？」

孝志「そうだ。だからもつといっぱい帰って
来い」

仁美「(無言)」

孝志「仁美？」

仁美「孝志……」

孝志「うん？」

仁美「いつか帰ってくるよ。アスパラのそよ
ぐ街に……」

エンディングテーマ『遠く遠く』

Σ